

社会科教育の立場からみた国際理解教育の問題点
-国際理解教育への社会科教育からのアプローチに関する研究(1)-

米地文夫* 藤原隆男* 大橋文四郎** 久保智克** 菅野亨**

(1993年12月8日受理)

Fumio YONECHI, Takao FUJIWARA, Bunshiro OHASHI,
Toshikatsu KUBO & Toru KANNO

Some Problems on "Education for International Understanding"
-Approach from Social Studies
to "Education for International Understanding"(1)-

I はじめに

日本における国際理解教育は、1953年ユネスコの呼びかけに応じて「国際理解教育協同実験活動計画」に参加したことに始まるという(日本ユネスコ協会国内委員会1971)が、その後、広がり点では必ずしも十分ではなかったとはいえ、着実に進展していたように思われる。しかし、1970年代半ばからは、このユネスコ主導の国際理解教育は停滞(西脇1993)するが、やがて日本のいわゆる国際化時代到来の認識の高まりとともに、再びその重要性が指摘されるようになり、学校教育の現場をはじめ教育各界において、国際理解教育へのより広汎で、より多様な理論的ならびに実践的な取り組みが、期待されてきているのである。

筆者らは社会科教育に関わるものとして、国際理解教育への社会科教育サイドからのアプローチの問題に強い関心を寄せ、これまで若干の論考や実践記録を公けにしてきた(米地1977, 久保1992など)が、さらにこの問題に対する研究グループを作り、研究・実践を進めることとなった。本稿は、その第一報として、社会科教育の立場からみた国際理解教育上の問題点の所在を指摘し、我々の今後の研究の立脚点を示すものである。

II 国際理解教育と社会科の関わり

筆者らは国際理解教育の根幹は社会科領域の教育であると考えます。

日本の国際理解教育の源流は、江戸時代の西川如見の「増補華夷通商考」や、明治の初めの福沢諭吉の「世界國盡」などに遡るのかも知れない。鎖国体制の中でも、海外への関心は強く、もちろん近代日本の国際社会への船出にあたっては、数度の海外使節団の派遣、

* 岩手大学教育学部社会科

** 岩手大学教育学部附属小学校

お雇い外国人の招傭、海外への留学生の派遣、などのルートを通じて、また教科書や啓蒙書を用いて、海外事情を急速に学ぶ必要があったのである。これらは、現今使われている意味での国際理解教育にはあたらないかもしれないが、国際理解への強い欲求は、長く日本人のなかに生き続けていたといえる。それらは、一方では国際社会に組み込まれてゆく中で海外からの技術移転や政治経済文化の諸制度の導入を目的としているとともに、その基盤として国民に実利的な知識を与えるためのものであり、他方では日本人の遠い未知の世界への憧れをかき立てるものでもあった。

しかし、現在の日本人は、すでに国際的な政治経済の枠組みの中で中心的な役割を果たさざるを得ず、反面、溢れんばかりの海外の情報が流入する中にあり、国内においても多くの外国人と接する機会が激増し、かつ海外渡航も日常的な行動になってきている。子どもたちの生活にすら、その影響が及んでおり、生活科的な学習のなかに国際理解教育に関する内容が組み込まれるのは、決して奇異なことではなく、当然のことと認識される時代を迎えつつあるといえよう。

かつての地理をはじめとする（現在の社会科に相当するところの）分野における海外に関する教育は、遠い世界についての非日常的な知識の詰め込みになりがちであり、世界を身近なものとして、その中に生きてゆくための能力を与えるものとは、ほとんどなり得なかった。このような欠陥は、外国語教育にもみられ、例えば戦前の中等学校などにおける英語教育が読み書き中心であったため、今もその尾を引きずって、話す、聞く、という能力がなかなか身につかないというような点にもみられる。

外国語教育が、（外国語教育関係者の反論を恐れずに言えば）skillの伝授にとどまりがちであるのに対して、社会科教育はskillのみならずspiritないしはsoulに深くかかわるものであって、より深い国際理解をもたらすものである。もちろん、古くは言霊といったほどの、言語のもつ役割を過小評価するわけでないが、社会科的な裏付け（をどちらの教科で学ぶかは別として）を欠いた外国語学習は、やはりskillにとどまるであろう。ここでskill, spirit, soulなどの英語の語彙を用いたのには他意はなく、外国語教育に敬意を表して、それらを用いることにより、日本語の持ちがちな手ずれした特殊日本の感覚を避け、国際的？な概念に近づけようとしてみたのであり、その背景には欧米の文化を中心とした精神的世界や実務的技術の概念の方が国際的なものとして一般化しやすいという事情があるからである。（欧米中心ではなく、アジア、アフリカなどの文化についても重視すべきであるが、これについては別に論ずる。）

すなわち国際理解教育においては、その広い関連領域の中でも、特に床としての生活科（社会科を中核とした）領域の学習と、柱として地理的分野を中心とした社会科的領域の学習があり、それに支えられた屋根としての外国語学習とがあるわけで、三者の相乗的効果が期待されるのである。

その社会科的領域に関しては、これまでの知識偏重の教育から、経験学習的な教育への指向が強まりつつある。そのような動向と国際理解教育との関係について、水間(1993)は「国際理解の学習においては外国を訪ね、現地の人々と生活をともにする場面を想定したり、外国旅行計画を机上で考案したり…といった体験的学習」を提言し、そのような「疑似（と同氏は書いていないが）体験学習」や留学生との交流会などの活用を社会科の新学力観による「国際理解学習」の見直しとしている。

